

国際熱帯いも類学会に参加して

東京国際大学教授
川越いも友の会会長

ベーリ・ドウエル

熱帯いも類の専門家たちの、3年毎の研究
会が国際熱帯いも類学会である。最近では、
1994年11月中旬、ブラジルのサルバドル市で
開催された。

国際熱帯いも類学会という組織は25年前創
立した学会で、目的は熱帯いもの栽培や利用
などを推進することである。同学会で扱う熱
帯いも類といえば、キャッサバー、ヤマモ
類、サツマイモ、ジャガイモ、タロイモ類な
どを含む。今回の会場、ブラジルがキャッサ
バーの原産地なので、キャッサバー関係の研
究発表が主であった。創立以来の学会の会場
が熱帯や亜熱帯の国に設けられた。米国ハワ
イ州（1970）、ナイジェリア（1973）、コロン
ビア（1976）、フィリピン（1979）、ペルー
（1983）、カリブ海のグアデループ（1985）、
タイ（1988）、ガーナ（1991）、ブラジル（19
94）である。

会場が毎回異なり、研究発表のほかに、現
地の試験場などを見学することもある。

今回の国際熱帯いも類学会の参加者は140
人位で、40ヵ国以上からであった。研究発表
は英語、スペイン語、ポルトガル語で行われ、
参加者が、劇場で歌舞伎の説明を聞くように
ヘッドフォンを付け、同時通訳により行われ
た。

日本で国際化という課題が良く出てくるが、
残念ながら、この国際的な学会へ、日本人の
参加者は2人しかいなかった。鹿児島県バイ

オテクノロジー研究所所長、樽本勲さんが鹿
児島での最新のさつまいも品種改良やさつま
いも利用について展示発表したし、京都大学
の寺内良平助教授がやまいもの遺伝子につい
て発表した。寺内助教授は学会からやまいも
発表賞を受賞した。

学会では、育種、害虫、加工などの農業の
専門的な発表が多かった。せっかくブラジル
が会場になっていたのも、いも類がブラジル
の国民の食生活にどんな役割を果たしている
か、聞きたかった。

幸いに、外食や、市場で、いも類が多少見
られたので、ブラジルのいも類食生活の様子
が少しわかってきた。けれども、ブラジルは
日本より人口ははるかに多いし、面積は日本
の20数倍広い。その上、ブラジルは地方によ
り、民族の分布が違う。だから、学会会場の
サルバドルの食事がブラジルを代表している
とは、とても言えない。むしろ、昔、アフリ
カからサルバドルへ奴隷として連れてこられ
た黒人の子孫がおり、サルバドルの人口のほ
とんどが黒人や黒人の混血なので、料理はア
フリカ風と言った方がよいかもしれない。

次回の国際熱帯いも類学会の候補会場はト
リニダッド、オーストラリア、日本、米国の
アラバマ州のタスキギー大学の順番である。
日本が会場になれば、どこで同学会を開くの
が最適だろうか。